



「駆け出し」と「草」や「木」との関わり

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員
石原産業株式会社 代表取締役 専務執行役員 バイオサイエンス事業本部長
堀江 幹也

現在の会社に入社して国内向けの技術サービスを行う部署に配属された。そこでは主に自社除草剤使用法の社内外への説明や、使用者の問い合わせ等への対応の業務に約3年間従事した。その間、何度か水稲除草剤試験の手伝いなども経験し、農業業界で言うところの「草」の世界の一端を垣間見た。それ以降は、海外の殺虫・殺菌剤の開発や営業を行う部署に配置転換となり、その後は主に海外関係の仕事に従事してきた。しかし長い間、この業界にはいるが「草」の分野では「駆け出し」のままである。

長いこと「駆け出し」のままであるのは「草」に限ったことではない。随分長いこと蝶の蒐集をしているが、この分野でも「駆け出し」の域を脱せずにいる。大学生の長男も蝶を蒐集している。最近、息子の採集の近況を聞いたときに、この蝶の蒐集の世界でも息子のはるか後塵を拝していることに気付かされる。

幼虫期に肉食の蝶もいるが、大抵の蝶の幼虫は植物を食べで成長する。従い、蝶を集めるには「草」と「木」をある程度知らなければならない。昔の田舎の小学生の間では常識であったモンシロチョウの幼虫はアブラナ科、またキアゲハの幼虫はセリ科の植物を食べることなどは読者諸兄姉の間でもご存じの方々も多いのではないだろうか。ベニシジミがスイバやギンギン、ヒメシジミがヨモギやイタドリを食するので仕事での「草」の世界と蝶の世界の「草」も少し重なる部分がないわけではない。この業界には蝶の同好の士が結構いらっしゃる。皆さん蝶の世界に造詣が深く、到底、小生の及ぶところではない。このような「駆け出し」ではない蝶の蒐集家の諸兄姉はこの業界の「草」の世界にいささかの抵抗もなく入れたものと想像している。

自身が蝶の世界で未だ「駆け出し」であるのには理由がある。蝶の嗜好がかなり限られているのだ。限られたタテハチョウとシジミチョウにしか興味が無いのである。従いつつまでたっても知識が深まらない。興味の対象の蝶が限られれば関係する「草」と「木」も限られてくる。通勤や屋外を散策する際などには、ブナ科、ニレ科とクロウメモドキ科、ウマノスズクサ科、バラ科などの数種の「木」や「草」に専ら関心

が限られ、無意識のうちにこれらの「木」や「草」を探したり眺めたりしている。

都会の街中でも気になる「木」はある。クスノキとエノキだ。街路樹としてよく植栽されているクスノキの葉をアオスジアゲハの幼虫が食べる。本種の幼虫はなんと^{ひょうきん}も剽軽でかわいらしい。街中でクスノキの周りをアオスジアゲハが忙しそうに飛んでいたりすると卵や幼虫を探して暫くの間、眺めてしまうことがある。運が良ければ街中で偶に本種の幼虫や蛹を見ることが出来る。もう一方のエノキは一里塚によく植栽されているし、稀に街中の街路樹としては植えられていることもある。また道端のツツジが植栽されているところにエノキの小さい木を見つけたりする。これは鳥が種を運んだのではないかと想像している。エノキを利用する蝶は多い。日本の国蝶であるオオムラサキや門外漢の方には姿かたちを思い描くのは難しいと思うがゴマダラチョウ、テングチョウ、ヒオドシチョウなどがエノキを利用している。

これらの蝶に加え本州でエノキを利用する蝶が1990年代の後半に1種増えた。中国本土から関東に持ち込まれたと報道されているアカボシゴマダラである。アカボシゴマダラはその成虫の後翅外縁に4つの赤紋があり格好がいい。元々奄美大島に本種の奄美亜種が生息している。奄美亜種は後翅外縁の赤紋がきれいな円をなしている点で中国のものより格好よいと勝手に思っている。この奄美亜種を随分前に採集に出かけた。普通の人々がたやすく採集するところを随分苦労してわずかな数を得たというところが「駆け出し」の「駆け出し」たる所以の一つである。

さて関東に持ち込まれたアカボシゴマダラの方は特定外来生物に指定され分布域を広げているようである。東京では新宿御苑や日比谷公園あるいは街中でも普通に本種を見ることができるようだ。名古屋市の東山公園近くの大学の構内でも今年エノキの小木に本種の多数の幼虫と卵を息子が観察している。筆者が勤務している大阪の街中や寓居のある阪神間でエノキを見かけるたび眺めているが「駆け出し」の故か未だに本種を観察する機会に恵まれていない。